

ロボットオリヒメ 学習支援に効果

院内学級と普通学級をつなぐ学習支援などに使用されている分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」の検証会が、鳥取大医学部付属病院（米子市）であった。日本財団の助成金で2017年度から、オリヒメを使用している米子市立就将小と県立の鳥取養護学校（鳥取市）、皆生養護学校（米子市）で使用した効果が発表され、県の担当者や医師、オリヒメを製造するオリィ研究所（東京）の担当者らが課題などを話し合った。

検証会は14日にあり、就将小の上村一也校長が、不登校傾向の児童が登校後にオリヒメを使って別室から教室の授業に参加する事例を紹介した。欠席日数が過去3年度が52～112日だったのが、18年度は14日まで減った。ただ、在校時間が短かったことが課題として示された。

不登校児 授業参加など

手を上げたり首を振ったりする双方向通信によるコミュニケーションのとりやすさや、一方向通信に切り替えることで病児の姿が映らないようにできることなどが利点としてあげられたが、通信環境を安定させる必要性などが指摘された。

県教委特別支援教育課によると、19年度は県が664万8千円の予算で、就将小に1台、鳥取養護に3台（うち1台が視線の動きをロボットが感知する「視線入力」仕様）、皆生養護に4台（うち1台は視線入力）の計8台を配備する。病気療養児の教育支援として、県立学校や市町村立学校への貸し出しにも対応していく予定という。

（長崎緑子）

米子で県・医師・研究者ら検証会



分身ロボ「オリヒメ」の学習支援の効果について話し合う教育・医療関係者ら＝米子市西町